

「ゆらの」物語

ゆらの代表 清水秀明氏

(愛媛新聞 四季録 平成18年10月～平成19年3月毎週日曜日掲載)

1. ゆらの物語

今、私たちは、久万高原町二名にある自然と人の共生の場「由良野の森」で、里山づくりに取り組んでおり、人と自然の相互関係、相互依存の本来の姿を求めている。会の名称は「ゆらの」で、私が現在は代表である。

里山は、ドングリを中心とする広葉樹林で、動植物の生態に沿ったものになるよう配慮している。この共生林の担当は山本栄治さんで、『小田深山の自然』という本の編纂に関わり、動植物の生態に詳しく、土木の作業も自由にこなす稀有な方である。人間界の担当というか、人との関わりを担当するのは鷲野宏さんで、現在「由良野の森」の管理者である。この人達との関係は、どのように「由良野の森」ができてきたかという中で、再度述べる機会があると思う。

今回四季録を担当するようになったが、私が自分に何時も言い聞かせていることは、「自分はどんな風にもものを認識しているのだろうか」をいつも意識していなさいということだ。認識するためにはまず感じる必要があるが、今は感覚の中でも視覚と聴覚、特に視覚が異常にまでと言っていいほど拡大され、触覚とか味覚という感覚がなおざりにされる傾向が強まっている。したがって私の診療においては、触診がおろそかにならないよう、患者さんを診ないでデータばかりを診ることがないように、つとめて意識している。

また認識において重要な役割を果たすのが、言葉だ。古典の和歌などに代表される言葉には響きがあるが、今の言葉は、パソコン・ケ・タイ時代の特有の短縮化された言葉が溢れ、言葉に想像力の奥行きがないように思われる。この言葉の問題は、辛抱が出来ない子供たちと言われることとも相関するように私には思える。

認識にはいわゆる五感を超えた様々なレベルがあるが、子供達が反射的な反応ではなく、自分にひっかかるものをこころの中に留めじっと持ってゆき、何かの拍子にそれが花開くのを待つという姿勢を育てていくことで、認識の意味に気付いてくれるのを願っており、「由良野の森」がその手助けになればとの思いである

光明クリニック院長 清水秀明

2.放人

四季録はエッセイなので、毎回違った事柄をとり上げて書いてかまわないのだが、私の場合、人と自然の共生の場を作る活動を、久万高原町の「由良野の森」で行なってきた関係上、「由良野の森」の活動を通した目で、しばらくはこの四季録を書いてゆきたいと考えている。今回は、「由良野の森」の構想を、どのようにして思いついたかがテーマだ。

ある時と言っても、由良野のことを耳にしたのが平成十四年で、土地購入が翌年ということからすると、今から四五年くらい前だったと思われる。たまたま私が階下へ降りてみると、女房がテレビを見ているところで、それを何気なく見てみると、ちょうど牛が木の間から顔を出している場面だった。牛は一頭だけではなく何頭も木立の間に見え隠れして、「牛は牧場の中にいる」という私の持っていたイメージを、下草や灌木が打ち砕いた。牛たちの表情は穏やかで、幸せそうに見えた。その時に、あっ、これだと思った。放牧ではなく、放人。

その頃私は、がん患者さんやその家族の方々の話を聞く機会があり、「生きるとは何か、死ぬこととは」という根本的な問題や、尊厳死、臓器移植などについて、自分なりに考えていた。また、介護保険は既にスタートしていたが、色々問題が出てきた頃でもあった。そうした中で、自分に出来ることは何だろうかと問い続けていた。介護に自分が関わることが果たして、自分を含めた関係する人を幸せにするだろうかと問い続けた時、それは、私が参加しなくても、多くの人に参加する事で進んでゆくだろう、ということが想像できた。そう考えたのは、高齢化社会によって全ての人が、介護に関わらざるを得なくなるだろうと思ったからである。

では、「私にとっての社会との関わりは、どうあるのが自分らしいのだろうか」と考え続けていた矢先の、タイムリーなテレビの場面だったとしか言いようがない。私は、自然環境の立場から「由良野の森」を考えただけではない。人が幸せに生きるにはどうすればいいのかを考え続けた先に、木立の中の牛がいた。

清水秀明 光明クリニック院長

3.入札

久万高原町の二名に、競売になる土地があることを、大野さん（久万高原町出身）が教えて下さった。牛が木立から幸せそうな顔を出すテレビの画面を見て以来、この方にどこか良い土地がないか頼んでいたのも、気にかけていたのだろう。この土地について特別問題はなかったが、私にとっての問題は、競売であることと入札だった。今まで全く経験がなかったのでどうしようと迷ったが、これも良い経験と思い入札に参加することにした。入札までに所有者が「土地を案内します」と言うので、案内してもらった。

案内された時、いくらくらいの値段を付けたらよいか聞いてみた。今になってみればそれもおかしな話で、売ろうとする相手側にどのくらいの値をつければ良いか聞くのだから。普通は自分で競売になっている他の物件を調べるとか、もう少し他の人の話を聞くとかするものだが、何とも、私らしいといえば私らしい。その土地は素晴らしく、要するに牛が木立から顔を出すのに最適な、緩やかな傾斜の南向きの土地だった。その時までは、土地の広さも、正確な場所も分かっていたし、また、「ゆらの」という名前がなんとなく良い響きがあるのを感じていた。

いつ入札するかの日時も決まったので、それまでの情報と色々なことを総合して、自分なりに大体の値段を考えた。値段を考えたといっても、精々が人から聞いた値段が参考になるという程度の、てんぼなものだったが。ところが、入札の時の状況を思い出そうとしても、初めての入札で舞い上がっていたためか、希望者がそれぞれ思う金額を書いた札を箱に入れたのか、それとも誰かに手渡したのかすら、思い出せない。ただ記憶に残っているのは、入札したことだけである。

それでも、入札の結果なんとか土地の権利は手にしたが、次は実際にどうやるかということが問題である。自分は、今植わっている桑を切り払って、新たな広葉樹を植える術を持たないし、一人でやってゆくには大きすぎる広さだ。

清水秀明 光明クリニック院長

4. 遍路道

久万高原町の「由良野の森」に、遍路道が通っている。ここで、遍路道が取り持つ縁を書いてみたい。由良野の森の管理者である鷲野宏さんとは、もう十年以上も前になる、阪神大震災の時から知り合いである。

話は少し由良野の森からそれるが、阪神大震災は、ちょうど私が前の病院を辞めて開業準備中に起こった。松山ユースホステルの平野博昭さんたちが、震災が起こって一週間目に被災地に出かける時、誰かお医者さんが行ってくれたらありがたいのだがというので、ナースである女房と一緒に同行した。老人ホームのお年寄りたちが、震災で居場所がなくなったので、一時的にユースで面倒を見ようということのようだった。

神戸はひどい有様だった。あちこちでビルが傾き、家がつぶれていた。被災後一週間どころだから、直後は火災もあり、もっとひどかったのだろう。今の神戸を見ると、当時震災が本当にあったのだろうかと思ってしまう。

お年寄りたちを運ぶバスは、あるバス会社がボランティアで提供してくださり、無事に松山まで連れて帰ることができたが、それからがまた大変だった。一月二十五日から三月二十日までの約五十日間、ユースが場所を提供したが、ボランティアの人たちが交代で面倒を見なければならず、無論、平野さんたちは目の回るような忙しさだった。また、資金や物資もこの方たちのおかげで集まり、被災地に送ることができた。

鷲野さんは、当時神戸復興支援を積極的におこなっていたNPO「神戸元気村」を主催していた山田バウさんのところでボランティアとして、炊き出しをはじめ様々な活動に従事していた。私は女房の美保子と一緒に、定期的にお年寄りたちを訪ねて、健康状態をチェックし、時には治療も行なった。神戸の復興につれ、ユースに居たお年寄りたちが何とか神戸に帰ることができ、ユースで大事にしてもらったことを大変感謝していた。

このように鷲野さんとは以前からの知り合いということではあったが、なぜ遍路道が関係してくるかと言うと、日本人がよく「ご縁で」と口にする縁起の不思議による。そもそも始まりは、と続けたいところであるが、少し長くなるので次回にこの続きを書きたい。

清水秀明 光明クリニック院長

5. 遍路道

「由良野の森」の、遍路道の続編である。

久万高原町で木地師をしている甲斐義孝さんの奥さんの芳子さんが、東京から引っ越しきてしばらくして、巢を焼かれたムササビの子を育てることになった。ムササビの子を育てるのは大変な苦勞があったようだが、芳子さんはそれが楽しめる人だった。そのムササビを育てた子育てエッセイが、『ムササビの森の昼ごはん』と『ムーチョン兵衛山に帰る』という本になり出版され、それに目を留められた辰濃和男さんと交流するようになり、辰濃さんが歩き遍路をする時には、甲斐さんのところに泊まれるようになった。

辰濃さんは、朝日新聞の天声人語を書かれた方だが、『四国遍路』という本も書かれている。以前から甲斐さんと由良野の森を管理している鷲野さんは知り合いで、鷲野さんたちが西表島に行く時に、沖縄の染織で有名な石垣昭子さんを、辰濃さんが紹介してくださったのが、遍路道の縁である。

遍路道で少し脱線してみたい。辰濃さんが歩き遍路をしていた時、あるお寺で、若い女性が三味線を弾いている場面に出会った。どうも歩き遍路をして、「警女唄」を奉納している様子だったので、甲斐さんに「泊めてあげて欲しい」と連絡して、甲斐さんご夫婦が泊めてあげた。この女性は月岡祐紀子さんという方で、警女の旅を追体験したいという気持ちがあり、遍路をして三味線を奉納演奏するという形で、その気持ちを表したかったようである。

その後、甲斐さんから私のところに連絡があり、松山に下りて来た彼女を泊めることとなった。その頃私は病院の二階に住んでおり、二階で御礼にということで「葛の葉の子別れ」という警女唄を、三味線を弾きながら聞かせてくれた。その時私の女房が、「貴方は声がいい」と褒めたのに対して、プーと膨れっ面をしたのを覚えている。邦楽家の父の元で、小さい頃から三味線に親しんできた自負があったのだろう、表現が素直だった。でも、若い女性で歩き遍路をするのだから勇気も有る。親御さんは反対されたそうだが、あたりまえだと思う。これで終わりかなと思ったら、一度東京に帰ってまた遍路に来たから、並の二十歳過ぎの女性ではない。たいしたものだった。

清水秀明 光明クリニック院長

6.西表島の生活

由良野の土地購入が正式に決まる少し前のことである。「歩く観音さん」と私が命名している女房と、久万高原町で木地師をしている甲斐さんご夫婦が、沖縄の遙か彼方、石垣島より船で一時間の西表島に住んでいる鷺野さん（現由良野の森管理者）たちの所を訪ねることになった。その頃鷺野さんたちは、西表の大自然の中で生活をして島の人達と交流し、奥さんの陽子さんは染織家・石垣昭子さんの弟子として修行をして、ある程度、染めや織りが出来るようになっていた。

西表島は自然の素晴らしいところで、特に月ヶ浜という砂浜が美しかった、と帰ってきた女房に何度も聞かされた。夜のエビ捕りは面白かったみたいで、光を当てると、エビの目が光るため居るのが分かるので、そこをさっと網で掬うのだそう。上手下手があって、甲斐さんのご主人は、木地師という職業柄器用なので上手に掬うのだが、私の女房はうまく掬えなかったらしい。女房に言わせると、「パーマン（甲斐さんのこと）はちゃっかりといい網を使って、私には使いにくい網をくれたのよ」とのことだったが。

捕ったばかりのエビを使ってパエリアを作ってみようということになった。しかし、簡素な生活をしていた鷺野家には専用の鍋がなく、仕方なく中華鍋を用い、ふたの代わりに庭に生えていた月桃（ショウガ科の植物）を使ったところ、思いがけず香りの良い料理ができ上がった。つわりで食欲のなかった陽子さんも、珍しく「おいしい」と食べる事ができたようだが、親しい三人の顔を見て安心したのかもしれない。

鷺野さんたちの島での生活を物語るエピソードを、最後に紹介したい。鷺野さんたちが西表島での生活を始めてしばらくして、大きなヤシガニを見つけた。明日食べようと言っていたが、子供の天音（あまと）が、「ヤシガニの子供たちが、お父さんが居ないと行って待っているかもしれない」と言うので、「もう捕まらないように」と月ヶ浜の奥に放しに行ったことがあったということだ。

清水秀明 光明クリニック院長

7. 出会い

木地師をしている甲斐さんご夫婦と私の女房が西表島を訪問した際、女房が、鷺野宏さん（現由良野の森管理者）たちに今後のことをたずねた。そこで鷺野さんたちは、生活や子供の教育のことについて不安があること、また、そろそろ帰って、西表で習得した染めや織りを広めたいという気持ちもあることを率直に話してくれた。それを聞いて女房は、私たちが由良野に土地を得たこと、そしてそこで自然と人の共生の場を作りたいので、一緒にやるつもりがないかを聞いてみた。鷺野さん夫婦は本人たちで色々考え、また、師事している染織家の石垣昭子さんから「自分の島のことも大切に」と言われたこともあり、結局久万高原町に帰ることを決めた。

時期を同じくして、本当に不思議なのだが、甲斐さんのところで山本栄治さんにお会いした。甲斐さんから山本さんのことは、「動植物に詳しく、こつこつ自分で研究して、旧小田町の事業で『小田深山の自然』という本のとりまとめをした、すごい人なのよ」と聞いていたので、どんな人だろうかと思っていた。会ってみると、トトロ（宮崎駿監督の映画「隣のトトロ」のキャラクター）そっくりだった。以前から聞いていたのになかなか会う機会がなくて、こうして会ったということは、「山のことは山本栄治さんに任せなさいということなんだ」と確信した。そこで私は自分の思っていることを話し、快諾してもらった。そして『小田深山の自然』という本を読んでもみると、実にこれが本格的な学術書なのである。開発で本来の自然が消えつつあるのを惜しみ、記録を残しておきたいという趣旨でつくられたもので、各分野の先生方に原稿を依頼してまとめるのが大変だったらしい。

一度山本さんの研究所にお邪魔して標本を見せていただいたが、膨大なものだった。本当に、虫眼鏡でやっと見えるような小さな標本に、小さな文字がきちんとタイプしてあって、それにも感心したのを覚えている。「皆、チョウやトンボのような、大きくて目立つものをやりたがるけど場所を塞ぐので、小さなものを相手にするんよ」と話す言葉から、栄治さんの小さな生き物に注ぐ愛情を感じた。

清水秀明 光明クリニック院長

8. 「由良野の森」の始動

「由良野の森」は、共生林担当の山本栄治さんと、人間界のコミュニケーションをとり、森を管理する鷺野宏さん・陽子さん夫妻の協力を得ることができ、ここに場と人がそろったということになる。正式に土地を取得したのは平成十五年四月だが、その少し前に植えた栗の木は、この秋立派な実をつけた。

山の整備のため小型ショベルカーを一台購入し、栄治さんはそれを自在に操って、養蚕のために植えられた桑をドンドンと倒して行く。それらを積み上げてゆくのだが、見ていても大変な仕事だ。なんととっても桑が密集していて、入り込むすき間もないくらいだから。

桑の木は切ってもまた新芽が生えてくるので、広葉樹を植えるためには根っこから掘る必要がある。けれどもすべての桑を切り倒すのではなく、どこにどのくらい残すかは全体の環境との相談である。どこに何を残し、どこにどんな木を植えるかはすべて、NPO 法人愛媛生態系保全管理理事長でもあり、自然の生態を知り尽くした山本栄治さんの構想にかかっており、とにかく平成十五年は、山に木を植える整備で明け暮れたと言っていいだろう。

栄治さんが山の整備をしている間に、人間界のコミュニケーションの場づくりを進める必要があった。それにはまず、人が集まった時に語り合い、憩う場所として、由良野の森のゲストハウスの建設を始めようということになった。同時に、由良野の森を管理する鷺野さんたちの家も、一緒につくろうということである。

地鎮祭の時は本当に不思議だった。神主さんに地鎮祭の日取りを決めていただいたが、あいにくその日は朝から雨で地鎮祭ができるか危ぶまれた。甲斐さん、鷺野さん、福水さん（「ゆらの」会計担当）そして我々の、四組の夫婦八人は、地鎮祭が始まる一時間前から空を見上げて雨が止んでくれることを願っていた。始まる三十分前に少し雨足が弱まり、十分前くらいにはほぼ雨が止むということが起こった。なんと、ちょうどこの地鎮祭の間、雨が止んでくれた。そして地鎮祭が終わると、雨はまた降り始めた。自然は本当に不思議だが、不思議を起こすのは人の純粋な思いかもしれないとしみじみ思った。

清水秀明 光明クリニック院長

9. ゲストハウス

「由良野の森」のゲストハウスは、大まかな広さを私が言って、森の管理者である鷺野宏さんが設計を考え、実際の図面は知り合いの大興建設の大西国興さんが引いてくれた。

最初私が、「何も無い空間がどうしてもある程度いる」と言って、大西さんに鷺野さんが考えた設計を見せると、「こんなに広いところをどうするんですか」と聞かれた。「先生が別荘でも建てるのだろう」と最初思われていたのかもしれない。後は大工の勝本孝志さんと鷺野さんが、二人でゲストハウスを造ることになった。鷺野さんは西表島に行く前に、勝本さんの所で大工の見習いをしばらくしており、西表島でも大工さんの手伝いをしていたので、この仕事にうってつけと言えた。

ゲストハウス建築のためにさまざまな大工道具が要ると、材を加工する場所が要るので、所有者の残していった倉庫を使うことになった。しかし、屋根は雨漏りし、周りの板はボロボロだったので、それを先ず修理しなくてはならない。大工の勝本さんは、屋根瓦は積んだことがなかったが見よう見まねで、甲斐義孝さん一家もわれわれ夫婦も、鷺野さんのお父さんまでもが協力してくれて、何とか完成させることができた。周囲の板は、大工さんお手の物だから問題なし。見違える様に生まれ変わった。

ゲストハウスの棟上げも無事終わり、その後は少しずつ二人で仕事を進めていった。夏の久万高原町は涼しいので、勝本さんは蚊帳を吊り時々泊まって仕事をしていた。露天風呂に入るとの夜空は満天の星で、素晴らしかったみたいだ。秋になるとイノシシが葛などの食べ物を求めて現れ、大きなイノシシにびっくりしたこともあったらしい。そして、ゲストハウスは、全て地元の木材を使った木造りの家のため、「大工には非常に腕の見せ所がある、やりがいのある仕事だった」と話してくれた。

鷺野さんは、外壁の板を塗るのに、余りにおいがなく害のない外国製の塗料を取り寄せたりして、よく勉強もしていた。フロンが問題になり始めたころから環境問題に取り組んできていたので、われわれも壁塗りを手伝う際に、壁塗り特有のにおいの害を被ることもなく、またゲストハウス周囲に嫌なにおいが無いのが本当にありがたかった。

清水秀明 光明クリニック院長

10.植林

平成十五年中かかって、共生林担当の山本栄治さんは、植林のための土地づくりに一生懸命だった。「由良野の森」を町道が通っているが、そこから少し上った見晴らしの良い南向きの斜面の場所の桑を切って、どんぐりになる木を中心に植林することになった。

やっと土地の整備ができた平成十六年の三月に初めて、五十人近くの多くの人の参加を得て、コナラ、アラカシ、クヌギなど五百本を植えることができた。栄治さんの指導で、アラカシは常緑樹だからと周囲に植え、中の方にコナラやクヌギを植えた。二、三人一組で穴を30cm くらい掘って植えるのだが、「あんまりきちょうめんにせんでもかまん」と言う栄治さんの言葉に励まされて、何とか植えることができた。地元の二名小学校（当時）の先生や子供たち、保護者も参加してくれ大盛況だった。

この年は雨が降らず、植えた木が枯れずに育つか心配したが、栄治さんはさすがで、余り下草を刈らず少しでも乾燥を防ぐように配慮され、ほとんどの木が大丈夫だった。

秋に台風がやってきた。春に植林したコナラやクヌギたちのことを心配したが、由良野の森の被害は軽微だった。しかし、周囲の杉山はひどい被害を受けた。由良野の森に上がる遍路道は両脇が杉林なのだが、手入れが行き届いていなかったためか、がけ崩れを起こし、杉の木が道路に倒れて来た。大きな杉の木が電線に寄りかかって危険な状態だったが、電力会社もあちこち被害があるので、すぐには来てくれない。ちょうど患者さんで来られた電力会社の方が「自分はこの前まで久万高原町にいたから良く知っている、連絡してあげましょう」と言ってくれ、ありがたかった。人の縁に感謝するしかない。

久万町高原町も道路の仮工事をできるだけ早くしてくれ、道路は何とか通れるようになったが、由良野はまだましな方で、町内のあちこちで、これまでになく杉の倒木が散見された。全国的にも被害はひどく、これまでの植林の在り方や、下草刈や枝打ちなどの手入れ不足が、はっきり露呈した年でもあった。今回の被害によってやっと、放置林の問題が、少しずつ解決の動きを見せ始めたと言えよう。

清水秀明 光明クリニック

11.ポルト・アレグレ

平成十六年のある秋の日、岡山の T 先生より電話があった。愛媛県立中央病院時代の内視鏡の師匠で、“ろくろ”の腕前は、玄人はだしである。

何だろうと思って聞いて見ると、「ブラジルから備前焼の勉強に来ている、日系三世の人が国に帰るとこやけど、『由良野の森』のことを話すと行ってみたいと言うんだけど」とのこと。「へー、ブラジル」と思い、面白いねと答えた。

彼らが来る日曜日、われわれも翌日の準備のために、少し早めに病院に出かけた。ちょうど病院の交差点の手前で、岡山ナンバーのいかにも中古のワゴン車が、すぐ前を走っているのに女房が気付いた。「ちょっと前の車怪しいんじゃない。もしかしたら、松山駅前で待ち合わせているのに、駅が分からないのかもよ」と言う。「まさかそんなことはないよ、駅で待ち合わせているんだから」と私は言って、準備を済ませ待ち合わせの駅前に出かけた。なんと、あのワゴン車がいる。

挨拶を交わすが、見るからに好青年である。江原朋宏さんという方だった。生活道具を積んだ、車の後部から出てきた奥さんを見てさらに驚く。天真爛漫という言葉は、この人のためにあるという感じだ。奥さんはエミリアさんという日系三世のブラジル人で、備前焼の修行に来た人だったのだ。すぐに、出かけましょうと言うことになったが、私が「坂道が多いけどこの車で大丈夫？」と聞くと、「よく走るんですよ」と平気である。何か、久しぶりに日本の若者に会った、と心底思った。

久万高原町の由良野の森に着くと、ゲストハウスに入って「すごい」、山に登って「すごい」の連発である。森の管理者である鷲野宏さんたちと会って、もっと早く知り合いになりたかったと言う。山を登りながら、エミリアさんにブラジルのどこに住むのかと聞くと、ポルト・アレグレと答えてくれた。アルゼンチンの近らしい。そこで焼き物を始めるつもり、とのこと。江原さんは地質学が専門で、土の温度とか、土の性質を調べる役目である。「もうすぐブラジルへ出発するので、こちらで使っていた陶器類を全部送ります」と送ってきてくれた。なかなかのセンスである。今、由良野の森でフル活用させてもらっている。前途を祈りたい。

清水秀明 光明クリニック院長

12.新たな展開

「由良野の森」にとって重大な出来事が持ち上がった。平成十六年の冬に、最初に購入した土地に隣接する周囲の山の、土地売買の話があったためだ。そこは最初に取得した土地の上に広がっており、水源に関係しているところだったので、皆で相談した結果、購入した方が良いのではないかということになった。雑木山と、スギ・ヒノキが主体の山の両方にまたがっていたが、共生林担当の山本栄治さんは、「スギ・ヒノキの山も使いようがあるので、広葉樹にこだわることはない」とアドバイスしてくれた。

そこで、これまで由良野の森に関わってきた人たちが、二月の寒い日に久万高原町の鷲野宏さん（現由良野の森管理者）宅に集まって、今後のことを協議した。その時、重要な二つのことが決まった。ちょうどその時の記録が残っているので、少し経過をたどってみたい。

平成十七年二月十一日

- 一．会の名称：活動のための会を正式に立ち上げようということになり、会の名称を「ゆらの」と決め、活動の場を由良野の森とする。代表は、さしあたり清水秀明とする。
- 二．会員の件及び活動：会員募集をする。細則は後で協議とする。「会員となり、木を育てる活動や由良野の森でのさまざまな活動に参加することで、里山への理解を深めてゆく」ことが、その趣旨である。
- 三．新たな購入地の件及び資金：新たな土地購入のため「ゆらの債」を発行する。
- 四．事務局：「ゆらの」事務局を鷲野さんをお願いする。
- 五．植林の日程：三月二十日（日）とする。その時に、町道沿いの桜がテングス（天狗巣）病で弱っていることもあり、新たに由良野の森の道沿いに、桜五十本をソメイヨシノ中心で植えてゆき、桜の間に梅五十本、実が中位の大きさのものを植えていってはどうだろうか。

以上のようなことその他、パンフレットの増刷などが話し合われたが、重要な事項の一つは、「ゆらの」という会をつくり、活動する場を由良野の森としようということである。二つ目は、土地購入に際して、「ゆらの債」を発行して資金を募ろうというものだった。実は、この「ゆらの債」発行に関しては、参考となる方がおられた。岐阜で「あぶらむの会」を主宰されている大郷博さんという牧師さんで、素晴らしい方である。

清水秀明 光明クリニック院長

13.ゆらの債

岐阜の大郷博さんという牧師さんとは、円空仏で有名な、千光寺の大下大圓さんをお訪ねした時に紹介していただいて以来の知り合いである。

大郷さんは「あぶらむの会」を主宰され、国府町宇津江の「あぶらむの里」で、自然相手に農業をし、宿を営み、宿泊者の方々と語り合い、さまざまな教育プログラムを取り入れて実践されている。その一つに、ネパールでの子供たちの体験学習があり、実はゲストハウスに照明器具を送ってきてくれた宮崎の串間千秋さんが、当時小学校二年生だった上の子供さんと一緒に参加されている。この子供さんは岳という男の子だが、自分でお小遣いを貯めて、五年生の時にもう一度自分だけで参加している。よほど、大きな体験だったのだろう。

大郷さんは、体験に基づく教育ということ意識されて、それを実践できる場を求めている。「ある時、今、アブラムの里がある土地を通りかかった時に、その場所が光って見えた」という話を聞かせてくれた。そこで早速その土地の持ち主を調べたところ、町がそこを持っていることが分かり、大郷さんはすぐに町と交渉されたとのことだ。こういう行動力が、大郷さんの持ち味というか、素晴らしいところである。

町は、「大郷さんがここで骨を埋めるつもりなら売却しても良い」と言い、大郷さんはそれを了承され土地を譲ってもらうことになった。「ところで支払いはどうされますか」と聞かれ、「これから寄付を募ります」と大郷さんが答えたので、町は「この人物は、うさんくさい者ではないか」と疑い、以前勤めておられた立教大学にまで照会したらしい。こうした経過の中で、土地は全額寄付でまかない、また建物の建築のため五年間無利子無担保の「あぶらむ債」を発行し、多くの人の協力を得て「あぶらむの里」ができたとの話をお聞きしていた。

この話を参考に、われわれ「ゆらの」も、大郷さんに倣って「ゆらの債」を発行することを決めた。新たな土地を「ゆらの」が購入できたのも、「ゆらの債」を買って下さった方々をはじめとする、人の縁のおかげだと思う。平成十七年の春には、約十二町歩（十二万平方メートル）の土地を、「ゆらの」は所有することになった。

清水秀明 光明クリニック院長

14.ライブコンサート

久万高原町の「由良野の森」のゲストハウスは、平成十六年春からほぼ一年かかって完成を見た。

そのゲストハウスにピッタリの照明器具を、串間千秋さんが九州から送ってきてくれた。女房の義理の弟である。経歴が面白いので紹介すると、アメリカで十年近く会社勤めをして最後に日本に帰る時に、バイクで世界一周するつもりがサハラ砂漠でエンコしてしまい、一ヶ月音信不通になるという経験をしている。それでも何とか無事に日本に帰ってきて、今は、宮崎で電気設備の会社に勤めている。息子の岳君とネパールに行った男である。

初めは串間さんに配線や照明器具に関するすべてをお願いする予定だったが、何分遠いので無理だということになり、仕事熱心な瀬戸電設の松田貞夫さんに頼んだところ、木作りの内部に沿うよう、配線が目立たないようにときれいに仕上げてくれた。また、作り付けの素晴らしい本棚を寄付してくれた木工職人の大田菊則さんたちをはじめ、本当に多くの人の協力でゲストハウスが完成した。木地師の甲斐義裕さんはお父さんと一緒に、^{かえて}楓、

^{しおじ}塩地、栗材の三種類のテーブルを作って、それに、どんぐりや木の葉の^{そうがん}象嵌をしてくれた。

そこで、平成十七年四月に初めてのライブコンサートをゲストハウスで行なった。奈良裕之さんといわれる方で、世界の民族楽器の演奏家である。ゲストハウスは、五十人くらい入れるようにと思い造ったのだが、ちょうどそのくらいの人に来て、なかでも、子供たちが大勢参加して楽しんでくれたのがうれしかった。

アメリカインディアンの楽器を参考にした、弓のような楽器は特に面白かった。ゆっくり振るとブーンブーンと低い音で鳴るのだが、少しずつ速めるとピュン、ピュンという音に変わってゆく。自分でその楽器を振ってみると、音の変化がなんとも言えず楽しい。その他にもいろいろ、特別に製作してもらった楽器を持参して、それを皆に自由に触らせて、音を楽しむことを経験させてくれた。普通、演奏家は楽器を大切にするので、簡単には触らせないものだ。しかし子供たちにとっては体験が宝だから、そういう意味で非常に良い演奏会だったと思う。

清水秀明 光明クリニック院長

15.南風と笛の音

西表島から、石垣昭子さんと星公望さんのお二人が、久万高原町の「由良野の森」に来てくださった。「愛・地球博」の帰り道に、平成十七年六月に由良野の森に寄ってくれたのだ。

石垣昭子さんは、鷺野宏さん（由良野の森管理者）たちが西表島に移住する時紹介したように、西表島在住の染織家で、^{ぼしろう}芭蕉をはじめさまざまな素材を用いて、素晴らしい作品を生み出されてきた方だ。龍村仁監督の地球交響曲（ガイアシンフォニー）第五番に出演し、西表島での自分の創作活動の原点のお話をされている。西表島の自然を語り、その中に自分の作品があることを、訥訥と話されているのが印象的だ。鷺野さんたちが、人と自然の共生の場である由良野の森で活動を始めたのを喜ばれ、わざわざおいで下さったのだ。

星さんは、西表島の公民館長さんで、自分で手づくりの草木細工をされ、実際の生活で使える素晴らしい作品を作られている。石垣さんと一緒に愛・地球博に行かれ、西表島に帰る途中に由良野に寄ってくださり、その技術を由良野の森で子供たちに伝えてくれた。

子供たちが喜んだのは無論のことだが、私も含め大人も、^{かご}籠や^{ひしゃく}杓作りなどを教えてもらって一生懸命に作り、素材がこういう風になんか変わってゆくのかと感動した。

六月には完成していたゲストハウスだが、正式に、七月十七日に開所式を行なった。「ゆらの」代表の清水秀明が、これまでの簡単な流れと皆さんの協力への感謝の気持ちを表明した後は、島根在住の笛の演奏者である樋野達夫さんに、さまざまな笛の音を聞かせていただいた。笛の音は木造りのゲストハウスによく響いたが、とりわけ弥生の土笛や縄文の石笛は素晴らしく響き渡った。実は、我々夫婦は以前、木地師の甲斐義孝さんの紹介で島根の樋野さんのお宅にお邪魔し、そこで演奏を聞かせてもらったことがあり、その時の笛の音が素晴らしかったので、今回来ていただいたというわけである。

多くの、これまでにご縁ある方々が参加して、ゲストハウスの完成を喜んでくれた。こうした人の往来をみると、人と自然の共生の場としての由良野の森が第一歩を踏み出したのだな、というのを実感した次第である。

清水秀明 光明クリニック院長

16.こども森林博士号講座

画期的な「こども森林博士号講座」が、久万高原町の「由良野の森」で始まった。記念すべき第一回は、平成十七年九月二十三日に行なわれた。これは、講師であり共生林担当でもある山本栄治さんが、長年温めてきたプログラムである。栄治さんは、子供たちが自然と接し、自然に学ぶ必要があることを以前から言われていたのだが、これまで適当な場がなかったのである。由良野の森がそのような場を提供できるのは、非常にありがたいと思う。

私も参加できる時は、何度か参加している。何班かに分かれた子供たちが、木の高さを調べたり、周囲測定をしたりするのだが、栄治さんは必要に応じて、本格的なやり方と子供たちのために工夫したやり方を教える。木を切る実習をしたり、キノコの観察をしたりもする。子供たちは、三十分は熱心に集中してやるが、後は遊びに夢中だ。養老孟司さんが著書「超バカの壁」で言われているように「子供は自然そのもの」だから、当たり前といえば当たり前である。子供たちが由良野の森に遊びに来たがるというのを聞くと、うれしくなる。

また、「大人のための森林講座」も始まった。大人にとっても自然は分かっているようで、実はほとんど分かっていないことが多いのではないだろうか。

由良野の森で走り回る子供たちを見て思うのは、診察のために病院にくる子供たちが総じて全体にか細く、体を鍛えていないのを感じることである。無論体調が悪くて病院に来るのではあるが、筋肉がついていない。また肩とか体を触れてみると、カチカチである。テレビやパソコン、ファミコンという、人の作ったもので遊ぶ、もしくはそれらに接するというのが日常で、目の使いすぎが顕著でもある。私はいつも、体を動かすことを指導する。

目を使うということでは、由良野の森でも、外での観察の後で子供たちに昆虫などを顕微鏡でのぞかせ、実際どんな形をしているかを見せる。トンボの目を見ても木の葉をみても、その精巧な造りに驚かされるし感動する。テレビで見るバーチャルな世界ではなく、ここには実体験がある。本当の血となり肉となり、身についてゆくに違いない。

清水秀明 光明クリニック院長

17.アカネ

久万高原町の「由良野の森」に、アカネ（茜）が自生していることが分かった。中西進編の万葉集辞典によれば、多年生のつる草。初秋、薄黄色の小花が集まって咲く。根は赤黄色。緋色の染料。全て「あかねさす」「あかねさし」とうたわれ、明るい緋色をおびたの意とある。

万葉集に、あの有名な額田王が作ったと言われる「あかねさす紫野行きしめの標野行き野守は見ずや君が袖振る」の歌がある。ここでは茜だけではなく、紫も歌われている。紫は紫草科の多年性草花で、根から紫色の染料をとる。当時朝廷が紫草の栽培を命じていたようだ。歌の意味はさておき、万葉集に茜が「あかねさす」と歌われていることに注目したい。当時から染料として使われていたのだろう。

この茜が由良野の森に自生しているのを教えてくれたのは、共生林担当の山本栄治さんである。その栄治さんの紹介により、NPO 法人愛媛生態系保全管理のメンバーである藤原陽一郎さんが、第二回「おとなのための森林講座」で染色の指導をしてくれた。茜は緋色を出すのに使うが、茜を採取したときメリケンカルカヤも由良野の森の近くで見つけて、黄色を出すのにすごくいいと話してくれた。メリケンカルカヤは外来種であるが、茜は日本の自生種である。先ほどの歌に出てきた茜も紫も共に、今はほとんど見る事がなくなっている。特に紫は染めたことがないので、由良野で染織をしている鷺野陽子さんは、一生懸命に探しているところである。

染色は化学反応である。茜の根を酢酸にさらすと、緋色がだんだん出てくる。一回さらすたびに、色の深さが違ってくる。鮮やかな色を出すために、つばき椿の灰やみょうばん明礬も使う。メリケンカルカヤには、石灰を用いる。染色は、触媒や中和反応、酸化還元反応を上手に利用するが、そのたびに微妙な違いがあり、人を魅了する。

染色一つをとってもいつも思うのだが、人が自然界にあるさまざまな物を利用するとき、これまでにどれほどの人が、どのくらい試行錯誤を繰り返して来たことだろう。世界中でこれまでに人が行ってきた営みに、感嘆するほかない。我々も、先人のこれまで積み上げてくれた遺産に少しでも何ものかを積み上げるために、新たな体験を重ね続けなければなるまい。

清水秀明 光明クリニック院長

18.キノコ医者

「由良野の森」のゲストハウスの入り口に、イノシシの頭蓋骨^{ずがい}がデンとある。これはどうしたのと森の管理人の鷺野宏さんに聞くと、玉木芳郎先生が持ってこられたとのこと。

玉木先生は、現在は由良野の森から車で十分の父二峰診療所の医師で、県立中央病院の元院長先生である。院長職を定年で辞められた後、久万高原町の父二峰診療所に、どういうわけか来られたのである。先生は、私が県病院で内科医の駆出しのころ、外科でバリバリと仕事をされていた。本当に「ここでまたお会いするとは」という気持ちである。

由良野の森の入札の前に一度、先生にお会いした。その時に「ぜひ買って松を植えてほしい」と言われたので、もし買えれば先生が自由に植えてくださいと答えた記憶がある。

なぜ松を植えてほしいと言われたのかは迂闊^{うかつ}にもそのときは分からなかったが、後で、先生はキノコが好きで、キノコ観察会のメンバーであるとお聞きして、「なるほど」と納得した。この久万高原町に来られたのも、自由に山歩きをしているいろいろなキノコを探すのが一つの目的だったのではないかと思考している。

先生は、本当にあちこち歩かれており、由良野の森のことで、どこにどんなキノコが生えるかは、われわれよりずっと詳しい。無論、このあたりの山は、ほとんど知り尽くしていることだろう。

また、先生はイノシシのことにも詳しい。診療所にお邪魔した時に、イノシシの鼻を料理して食べるのはどうするかを話してくれた。「毛抜きで毛を抜かないといけないので大変なんだ」という話を、患者さんがちょうど居なかったので、熱心にしてくださった。それで、イノシシの頭蓋骨なのかもしれない。

突然に鷺野さんの家に来て、ニガウリ（苦瓜）のおいしい食べ方を教えてあげると言って作ってくれて、「翡翠^{ひすいあ}和え」と名前をつけましたとおっしゃる。本当にユニークな先生である。そのうえ、もとは外科の医者だから、けがでもなんでも診てくれるので、地元の人には大変ありがたい”赤ひげ先生”である。

清水秀明 光明クリニック院長

19.イタドリ

昨年の、久万高原町「由良野の森」での植林は小規模だった。これまでに植えたところに隣接して、どんぐりのなる木とキハダを植えた。森に、雨が降った時だけ水の流れる、枯れ沢が幾筋もある。雑木林との境界に近い枯れ沢沿いには楓を植えているが、その近くにも、コナラやクヌギとキハダを少し植えた。由良野の森は、土地のすべてを整備して植林せず、あちこちに桑やブッシュ（茂み）を残して、鳥や小動物に配慮している。こうした配慮に、共生林担当の山本栄治さんの、自然に対する気持ちが感じられる。

桑を切った後は日当たりが良くなるため、春にはワラビやイタドリが、雨後の筍の様に生えてくる。ワラビは夏ごろまで採れるし、食べてみて、イタドリが美味しいということを知ったので、四月から五月初めはイタドリ採りである。イタドリは微紅の斑点があり、漢字で虎杖と書く。茎が中空で、子供のころは水車を作ったり、遊びながら齧ったりしたものである。

採るときによく観察して見ると、イタドリにも茎の赤っぽいイタドリと、やや緑っぽいのがある。雌雄が異株のようなのでそのためか、それとも種類が違うのかが分からない。自分で図鑑を調べたり、人に聞いたりしてみた。若芽の時は赤っぽいと書いてあるが、はっきりしない。栄治さんは、個体差だろうと言う。きっとそうだろうと思うが、土壌とかの環境の影響も、実験して調べてみたくなる。

「山菜は食べるまでが大変」とよく女房が言うが、イタドリを食べるようになってから私もイタドリの皮むきを手伝うようになり、その言葉の意味がよく分かるようになった。イタドリを夢中でたくさん採るのはいいのだが、実際にその皮むきをしてみると、まだ終わらないのだろうかと思うほど、最初は辛気くさい。家に包丁が一つしかないので、私はピーラーでやる。鉛筆削りのような刃が自由に動くようになっていて、慣れれば意外と上手にできる。後のアク抜きや味付けは女房任せだが、ゆでる時間やどのくらい水にさらすか、自分で嚙んで確かめる事など、見ていて勉強になる。本当に何事も、百聞は一見にしかずで、体験して初めて身につくのを実感する。

清水秀明 光明クリニック院長

20. 桑の実の熟れる頃

久万高原町の「由良野の森」に、ワラビやイタドリがたくさん出るとは前回書いたが、実は特筆すべきは、桑の実のジャムである。ジャムと言っても、店で売ってあるほど煮詰めたものではなく、桑の実が舌で実感できる程度に煮詰めたものだ。

由良野の森の桑の実結構大きくて、ちょうど梅雨時分に、紫色に熟れたのを手で採って食べると、口の中が紫色になって子供の頃食べた味を思い出す。一昨年に初めて少し採ってジャムにしてみたが、これが思いのほかおいしくて、お世話になった人たち数人に差し上げたところ、皆喜んでくれた。

去年は、もう少したくさん桑の実を集めようと、由良野の森の監査をしてくれている宮内一さんの協力も得て、脚立まで用意して臨んだ。桑を揺すって採ればいいのか、いろいろ教えてもらってやってみたが、結局一つずつ手で採る羽目になり、しかも「特にこれは美味しそう」というのを取り落としたりして、散々だった。でも去年よりはたくさん採れたので、多くの人に桑の実ジャムのおいしさを知ってもらって、良かったと思っている。

桑の実の熟れる少し前、平成十八年の六月に、“アンサンブルさくら”のクラシック演奏会があった。バイオリンの柏原大蔵さんを中心とした、声楽とピアノのアンサンブルである。この催しは、画家の松田一先生の紹介で実現した。ちょうどそのころ鷺野宏さん（由良野の森の管理者）のお母さんから、「ピアノを由良野で使ってくれたら」という申し出があり、鷺野さんたちがピアノを設置していた。タイムリーだったといえる。柏原さんたちはまだ若いですが、教育現場や地域の公民館などで、クラシックに親しんでほしいと熱心に演奏活動をされている。

由良野の森の演奏会では、教育関係の方々を始め多くの方が来てくださり、ゲストハウスの定員をはるかに超えて、ぎっしり座って演奏に聞き入った。^{うぐいす}鶯の声^{うぐいす}が聞こえ、鳥たちのさえずりの中、本当に森の演奏会が実感できた。バイオリンの弦は、湿気に弱く切れやすいと聞いていたので心配したが、何とか切れずに無事に演奏会を終えることができ、ほっとしたのを覚えている。柏原さん演奏のシャコンヌには、少なからず感銘を受けた。

清水秀明 光明クリニック院長

21. 真夏の夜の夢

平成十八年の夏は、森の管理者である鷺野宏さんの一家が、久万高原町「由良野の森」に引越して来たこともあり盛況だった。

八月には、劇団ヴォイスによる「真夏の夜の夢」の公演があった。シェークスピアの原作で、劇団を主宰する二神健悟さんが脚本を書いたものだ。この公演のために、二神さんたちは一年前から準備をしていた。以前に、松山城の二之丸庭園で上演したことがあるとはいっても、野外ステージでの公演だから舞台や照明などの準備が大変である。

その準備の 때가、ちょうど台風が鹿児島に上陸し、宮崎、熊本、福岡と駆け抜けて行ったのと重なった。団員の人たちは、雨の中ずぶぬれになりながら準備したとのことだ。台風のため決行か中止か微妙だったが、「きっと公演の時には雨は止む」というわれわれの思いが通じ、本当に台風一過の涼しい上天気となった。それまでは虫対策とかいろいろ考えて、父二峰診療所の玉木芳郎先生には虫よけの薬まで手配していただいたが、結局のところ杞憂^{きゆう}に終わった。

私は、「ゆらの」監査役の宮内一さんと、かき氷を売ることになった。昔、田舎の盆踊りの時に食べたかき氷がおいしかったので、イチゴ、レモン、みぞれ、宇治の四種類のシロップを用意した。ところが、最初は氷をうまくカップに入れることができず、随分ぼったくりになったと思うが、皆さん文句も言わずに食べてくれた。最後の方では、われわれもカキ氷作りに慣れてきて手際が良くなったのだが、その時にはお客さんはもう居なくて残念だった。

上演は、午後三時からと午後七時からの二回あった。昼の野外での舞台は、全部が見えてしまう感じで何かしっくりこなかったが、夜少し暗くなってくると、舞台が映えるから不思議なものである。子供たちをどこかで出演させて欲しいと二神さんに頼んでいたところ、最後に妖精パックが魔法をかけるのを教えるという場面で出演させてもらって、子供たちは大喜びだった。女房の姪^{めい}で、小学校三年生の翔ちゃんも宮崎から一人で遊びに来ていたが、この場面に出られて喜んでいて。帰って、「由良野の森で遊んだのも良かったけれど、妖精パックが一番楽しかった」と両親に報告したとのことだ。

清水秀明 光明クリニック院長

22.目と目を合わせて

久万高原町の「由良野の森」にもコンピューターがある。実は私は、由良野の森にコンピューターは似合わないと思っているが、森の管理者である鷺野宏さんがホームページを更新したり、メールを受けるのに必要だということでやむを得ない。

このコンピューターの設置からメンテナンスすべて、「ゆらの」会員である久万川重広さんという方がやってくれている。彼は大変有能なコンピューターの技術者で、不具合の症状をちょっとこちらが言うと、すぐ故障の個所を直してくれる。見ているとやり方は、医師が患者さんを診るのと同じで面白い。

コンピューターの構造の理解は、ヒトの解剖学と同じである。まずコンセントの確認から始まって、ネットワークがきちんとつながってパス（経路）が通っているかを調べる。血管や神経が、それぞれちゃんと働くべき場所で働かないと、人でも体調が悪くなるようなものである。診断のツールは、故障の現象とそれに関係している構造の理解であり、治療の薬は状況によるが、コンピューターを動かすさまざまなコマンドであることが多い。無論、問題は故障以前の、ネットワーク自体に繋がっていないことが多いのではあるのだが。コンピューターの医者である彼が、由良野の森でホッとしているのを見るのは、何かしら微笑ましい。

コンピューターには疎い、高橋力弥さんという、植木職人でありかつ渓流釣りの名人がいる。由良野の森に、桜や梅や^{あんず}杏の苗木をあっせんしてくれた、その彼の信条が面白い。力弥さんは渓流釣りの時、決して人家や田んぼのあるところでは釣らないという人だが、人と話を決める時は「目と目を合わせて」を信条としているのである。メールや電話やファックスの類では駄目で、直接会って話さないと駄目だと言う。会って話すと、相手から伝わる顔色にしる息遣いにしる、五感で感じるものがある。機械を通した単なる情報は、同じ内容の言葉でも生きていないということだろう。

われわれが、コンピューターという大変便利なものを利用する際、よくよく気をつけておかなければいけないことが、この「目と目を合わせて」にある。私も仕事柄パソコンを使うが、いつも自戒していたと思う。

清水秀明 光明クリニック院長

23.自然と科学

久万高原町の「由良野の森」に、コナラやクヌギを植えたことは以前に書いたが、今はその木々が随分大きくなり、特徴のあるイガイガした葉を秋には紅葉させる。そこからの眺めが、私は好きである。はるかに大野ヶ原が見渡せ、気持ちがゆったりしてくる。広々とした気持ちになると、不思議なことに心が穏やかになってくる。人は本来自然なのだと思うと同時に、科学の力で、人がこれだけの広いところを、わずかの間に変えてしまうことが可能であるのにも驚かされる。

現代は、ある意味では人の能力を、科学の力によって通常のレベルを超えて発達させた時代である。例えば、観察する能力として視覚を取り上げてみる。肉眼では、月の表面にウサギがいるのかなという程度にしか見えないが、少し倍率のある望遠鏡でも充分クレーター状のものが見え、ハワイ島にある「すばる望遠鏡」だと銀河の果ての星まで見える。逆に小さなものは、顕微鏡で拡大して観察することが可能だ。

現代の科学技術はさらに、細胞レベルまで見える電子顕微鏡を用いて、細胞の有様まで見せてくれ、未知のミクロの世界が広がり続けている。言ってみれば、われわれは普段見ている目にそうした装置をとりつけて、随時切り替えて自然を観察しているとも言える。

聴覚についても同じである。通常人の聞こえる範囲は十数 - 二万ヘルツくらいだが、音が波であると分かって以来波動を出す装置や検知する機器が開発され、宇宙からやって来る電磁波をキャッチできるようになり、動物たちも超音波を利用しているのが分かってきた。ただ、われわれに聞こえないから認識できないだけで、我々の通常感覚を超えた世界が、この自然界の当たり前姿である。

よく考えて見ると、人は科学の力を借りてさまざまな機械を発明し、その能力を昔とは比較できないほど高めてきたので、今我々は、かなり自然のことが分かってきたと錯覚しているかもしれない。しかし実際には、朝霧や夕焼けの科学的説明はできても、その一瞬一瞬の変化はいまだ予測できない。この未知なる世界、自然の世界に身を置くことが、とりわけ今の子供たちには大切であると思うし、由良野の森がその一助になればと思う。

清水秀明 光明クリニック院長

24.道

私は、最初から医者になろうと思ったわけではない。高校生の頃は、何に自分が向いているか分からなかった。数学とか比較的好きだったが、それ以上に社会とかも好きだったので、理科系・文科系に当てはまらない人間、と自分で思っていた。しかし、「いい加減進路を決めろ」と担任の池田三男先生に職員室へ呼ばれたので、これはいかんと思い、原子力工学科に行くことに急遽決めた。物理はどちらかという、自分には苦手と言ってもいい科目だったのに、なぜかそうすることにした。

大学に入学してみると、ちょうど学生運動が盛んになってきたところで、入学早々「自分とは」とか、「生きるとは何か」の洗礼である。私自身は、角材を持って人を力で威圧したり傷つけたりすることは、本来の人の姿ではないと思っていたし、主義主張のあるセクト（教派）に入って行動するのも自分に合わないと思っていたので、こうした運動には参加しなかったが、自分を問うのに傍観者ではなかった。

グライダー部に入ったものの、毎日が大学の周囲のランニングである。空を飛ぶためには、走らなくてはいけない。なぜかという、グライダーには車輪がないので、滑空して降りてくるグライダーの翼をつかまえて併走し、止まるまで走り続けなければならないからである。そうしないと倒れてしまうのである。

二年生の秋頃だったと思う。ある時走っていて急に胸に痛みを感じたが、しばらくすると消えたので、知らん振りをすることにした。その後も、時に胸に痛みを感じることや背中の中の痛いこともあったけれど、筋肉痛だろうと自分で思い込むようにしていた。

ところがある日、電車に乗っていて、突然の痛みと呼吸困難が襲ってきた。とにかく苦しくて、思わずしゃがみこんでしまった。周りの人たちは何だろうと見ている、なんとなく遠巻きにしているだけである。電車が止まったので、どうにか駅前の病院に駆け込んだ。先生は私を診察してくれて、「すぐに入院しなさい。大学病院に紹介状を書くから」と言われた。痛みを放っていたためにこうなったなという後悔の気持ちと、これからどうなるんだろうという不安が交錯した。

清水秀明 光明クリニック院長

25.道

胸痛での入院後の続きである。大学病院は教育機関でもあり、臨床実習の症例提示のために、私も何度か出てくれないかと頼まれた。臨床実習の学生さんを前にして先生が、「この病気は、痩せて細長い体型の人に多い」と言うのを聞き、私は当時痩せていたので、この病気は何という病気だろうと考えたのを思い出す。

病気自体は、自然気胸という何の変哲もないものだったが、当時の私は、変な病気ではないだろうか、治らないのではないかとか、あれこれ思い必死だった。肺の両側にブラ（気腫性^{のう}嚢胞）があるので、手術は両側した方が再発しにくいと言われ、「両側か嫌だな」と思ったけれど、再発しにくいという言葉に引かれ、最初気胸を起こした側、半年後反対側を手術することに同意した。

手術は、脇を切開する新しいやり方だった。病棟担当医が術後の肺の標本を持って来て、ブドウの房状のブラを教えてくれたが、見たくはなかった。肺の手術後は呼吸のたびに痛みが走り、なかなか術後の状態に慣れなかった。まだ十分に痛みも気持ちも回復しない状態で、反対側の手術を受けた。当時私が若かったこともあり、先生の言われることには、なかなか嫌ですとは言いにくかったのを覚えている。

専門学部に進んだものの、基本となる量子力学にはお手上げで、その他の科目も全く理解できなかった。なんとか卒業にこぎつけたが、体力に自信がなかったのと、自分の病気のこともあり、主治医の先生に医学の道に進みたいと相談した。しかし先生には「止めたほうがいい」と言われ、原子力の講座の先生にも、「就職したいところを言え。何とかするから」と言われた。ところがこれまでの自分を振り返ってみると、選択肢があるときはいつも、必ず、しんどそうな、一見損に見える道を選んでいるので不思議だ。このときも、先生方の忠告や好意に逆らって、自分の思う道を選んでいる。

その後医学の道に進み、これはこれで、さまざまな経験をしてきた。いまだに病気の意味は分からないながら、病気については多少とも知識を積み重ねてきたと思う。ただ、「いつも今が最善の道であり、今の道こそ自分の心の表れ」ということを忘れてはならない、と自分に言い聞かせている。

清水秀明 光明クリニック院長

26.向き合う

半年間お付き合いいただき、ありがとうございました。最初の「ゆらの物語」から今回まで読まれた方は、「生きることの意味」を考えさせてくれる、出会いを中心とした一連の糸に織られているのが、お分かりいただけると思う。今回は映画をとりあげてみたい。

私が見た映画で印象にあるのは、チャップリンの名作と、宮崎駿監督の「風の谷のナウシカ」や「天空の城ラピュタ」である。チャップリンには幾つかの名作がある。「独裁者」の中で、チャップリン扮する独裁者が、最後に演説する場面は特に印象的である。始まってすぐの「I should like to help everyone-if possible (できるなら、すべての人の助けになりたい)」というフレーズと、途中にある「And so long as men die, liberty will never perish (人に死のある限り、自由は決して滅びない)」という部分が特にそうである。独裁者にこの台詞を言わせるところに、チャップリンの真骨頂がある。また、「殺人狂時代」でチャップリン演じる主人公の言葉、「誰にも愛が必要だ」は、常に真実であろう。

宮崎駿監督の「風の谷のナウシカ」は衝撃的だったし、「天空の城ラピュタ」も良い。監督の構想が素晴らしいし、よく勉強されていると思った。これまで自分でずっと持ってきた思いを、ここで一気に出しているという印象を受ける。言葉もまた、その意味を考えさせて素晴らしい。

私は「天空の城ラピュタ」のアニメから、「ラピュタってなんだろう」と考え自分で調べてみて、言葉は違うが、海のモンゴロイド、ラピュタ人を知った。また、主人公である女の子の言葉、「どんなに恐ろしい武器を持って、土から離れては、人は生きられないのよ」は、テクノロジーの現代に光を放つ。子供も楽しめるが、単なる子供向けではなく、大人が特に見るべき映画だと思う。「愛」と「勇気」が語られているから。

私たちの毎日は、「思いを実行する」の繰り返しである。何を思うかで結果は大きく異なってくるし、行動しなければ結果は出てこない。四季録の最初に述べたように、心に思いをじっと持ってゆき、それが花開こうとするその時、自分の心に向き合っていきたいと思う。

清水秀明 光明クリニック院長